

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

国立公文書館	
分類	③ ④
配架番号	3 A
	14
	60-3

軍事極秘

用濟燒却

米英一ソ一三頭會談、英國選舉及一ソ一フ對日作戦準備
進捗等ニ伴フ情報觀察

昭和二〇八三
大本營圖書部

目次

- 第一 米英一ソ一三頭會談
- 第二 米英重慶對日共同聲明
- 第三 英國總選舉
- 第四 一ソ一重慶會談
- 第五 米英一ソ一支配關係

b7c 261448

316.(3.53)

国立公文書館	
分類	
配架番号	60-3

めくれず

第六 「ソ」ノ對日作戰準備進捗状況

第七 結 論

第一 米英「ソ」三國會談

米英「ソ」三國會談ハ七月十七日ヨリ「ボツダム」ニ於テ開催セラレ八月二日終了セリ

一、本會談ニ於ケル三主要議題ガ最後歐洲問題、遠東問題、極東問題、極東諸國トノ協和條約起草ヲ目的トスル五外相會議會ノ創設賠償問題並ニ「ポーランド」國境問題等ナリシコトハ「ボツダム」三國宣言ニ依リテ明カナリ

然レドモ既ニ終戦期的様相ヲ呈シアル世界戦争ノ現段階ト最近ニ於ケル「ソ」ノ對日作戰準備進捗ノ状況トニ鑑ミ「ソ」ノ對日參

歐ヲ包含ム東亞問題ノ議題ニ上リタルコトハ略々確實ナルベシ然
カモ之ヲ簽署スベシト雖少カラザルニ對シ「ソ」ガ之ヲ否定モセ
ズ肯定モセザル態度ヲ持シアルハ中立ノ態度ノ意思通告ト來
日極態度ヲ露骨化シアル「ソ」ノ對日態度ニ儘ミ嚴ニ對テ要ス
ル所トス

三「ポツダム」宣言ニ於テ日滿通ニ言及シアラザルハ表面
的日「ソ」關係ヨリ見テ寧ろ當然ナルベシモ一軍事問題ニ關シ三
國共通ノ利害ニ關スル問題ニ就キ軍事顧問ニ於テ討論行ハレタ
リト發表シアル一應注目ノ要ナルベシ

三、東亞問題ニ對スル「スターリン」ノ態度ヲ判斷スルニ飽ク迄自主
的ニシテ米英ノ意圖打診ノ程度ニ止マリタルベク具體的問題ニ關
シテハ深入リヲ避ケタル算大ナリ

第二 米英重慶對日共同聲明

米、英、重慶三國ハ七月二十三日「ポツダム」ニ於テ日本ニ對シ即
時無條件降伏ヲ勸告スル共同聲明ヲ發表セリ

一、本聲明ハ米國ノ主眼ニ係ルモノト思考セラレ之ガ發表ノ真意ハ概
ホ左ノ如キモノナルベシ

ノ政謀略的ニ日本ニ於ケル和平氣運醸成ヲ阻ヒ日本國內ノ統制
ニ軍官民ノ離間ヲ策ス

2米國內ニ於テ蓋シテソノツアル對日即時終結主義ニ對スル趨勢
ヲ考慮スルト共ニ米國民ニ對シテ降伏ヲ肯ゼザルベキ日本軍トノ
今後ノ作戦ニ於テ被害増大モ又止ムヲ得ザルヲ認識セシメ豫メ
國內輿論ニ對シテ伏線ヲ布成ス

3今後ニ於ケル對日處理ノ基準ヲ示ス

ニ本聲明ニ「スターリン」ノ加入シテアラザルハ日「ソ」國交關係ノ
現状ヨリシテ當然ニシテ「ソ」ノ巧妙ナル自主的態度ニ徴スルモ

未ダ其ノ時機ニアラザルガ故ナリト觀ルヲ至當トスベク之ヲ以テ

米英文ト「ソ」トノ對立ヲ露呈セルモノトナシ或ハ「ソ」ノ對日

態度ガ依然現状ヲ以テ推秘スベシトナスハ危險ナルベシ

即チ今次三頭會議ノ結果歐戰ニ於ケル意義宣言發表ノ時機ト場所

等ニ儘ミ一顧「ソ」ノ諒解ヲ得タル後ニカラム之ガ「ソ」ノ對日

參戰機相ニ影響ヲ及ボスコトアルヲ豫見セザルベカラズ

第三 英國總選舉

英國總選舉ハ勞働黨ノ壓倒的勝利ヲ以テ修了「ソ」ノ對日

冠、一アトリー」内閣ノ出現ヲ見ルニハレリ

三新内閣ハ概ネ從前同様ニアレシ黨ノ内閣ヲ非調トシテ對内外
政策ヲ遂行スベク之ヲ英ノ對日戰遂行及英一ソ一關係ニ及ボス影
響ヲ考察スレバ左ノ如シ

一英ノ對日戰遂行上ニハ大ナル變化ナカルベク保守黨ニ比シテ對
日感情ハ寧ロ變化スルノ算大ナルベシ蓋シ英國內ニ勞働黨ノ對
内政策ヲ支持スル空氣濃厚ナルハ國内ノ厭戰気分ノ反映トモ觀
ルヲ得ベク新内閣ノ對日強硬意志表現ニモ對ラズ對日戰努力ハ
實質的ニ變化ヲル算ナシトセザルベシ

二勞働黨ノ對内政策ハ重要産業ノ國有化、社會政策ノ改善等穩健
ナル社會主義的戰後政策ヲ遂カニ實現スルト共ニ貿易ヲ振興ス
ルニ在リテ一ソ一動ノ夫ト一脈相通ズルモノアリ又勞働組合ノ
勢力ニ左右セラルル所少カラザルベク一ソ一ノ勞働組合組織ヲ
通ジテ行フ社會運動、思想工作等ト相連シテ之ヲ見ルトキ一ソ一
ノ英國親一ソ一化ヘノ利益ニ好個ノ基床ヲ提供スルモノトモ觀
察シ得ベシ一ソ一ガ勞働黨内閣ノ成立ヲ歡迎シアルモ亦故ナキ
ニ非ズト謂フベシ

然レドモ英國ノ傳統政策タル現状維持的保守政策ト歐洲ニ於テ

ル優位獲得トシテ、並ニ調トシツツ對米一ソ一、義務ヲ律セントスル根
本方針ニハ變化ナカルベク、新クテ從米一ソ一、強硬態度ヲ
和シ、摩擦ヲ回避シツツ對一ソ一、協調ニ方向ニ邁ム算大ナリ

第四 「一ソ一」重慶會談

一、宋子文ノ訪一ソ一ニ依ル一ソ一重慶會談ハ「一ソ一」政略關係ノ
調整準備等ニ米ノ意ヲ承ケ「一ソ一」ボツダム一ソ一會談ノ基礎ミヲ試ミ以テ
豫メ相互意思ノ一致ヲ達成シ企圖セル算大ナリ

二、而シテ「一ソ一」ト宋子文トノ會談六回ニ亘リ七月十四日附

共同聲明ニ於テ「一ソ一」本交渉ハ「一ソ一」支那關係ノ改善ヲ目的トシ之ニ

關聯シテ兩國ニ利益關係アル最重要問題ニ觸レタリ而シテ本會談
ハ廣汎ナル相互關係ノ實在ヲ示シタリト述ベアル點ヨリ觀察ス
ルニ本交渉ガ「一ソ一」重慶關係ノ改善ニ役ニチタルハ事實ナルベシ
三、本會談ニ於テ「一ソ一」重要問題ノ本質的諸問題ニ觸レタルコトハ右聲
明ニモ顯ハルル所ナルガ重要ヲ概ル現下ノ事情等ニ鑑ミ兩者單獨
ニ重要問題ヲ解決スルコトハ困難ナルベシ
又本會談ガ「一ソ一」相互ノ接近ヲ目標トスル努力ノ現ハレナリ
ト看ラルルモ、並ニ「一ソ一」關係ハ依然改善ノ見ゾ「一ソ一」ノ企圖ス

ル延安ヲ含ム獨立政府樹立ハ猶未ダ然レバモノカ加シ

第五 米英一ソ一支關係

米英一ソ一支關係ノ基本的方向ハ從來ノ例證ニ於テハ大ナル變化ナキモ現

實面ニ於テハ前述ノ如ク最近米英支對一ソ一關係ノ深刻ナル對立

據テ緩和スヘキ要因ノ現出ヲ想ハシムルモノナリ「一ソ一」ノ對日作

戰準備進捗状況トモ關係シテ最近ニ對テ要スル所トス

一、米一ソ一關係

「キヤロツプ」與「ニ」ニ於ケル「一ソ一」ノ對

日參戰ヲ希望スル者ハ著シク増加（七七%）「一ソ一」ガ參戰スベ

シト判断スル者ハ減少（本年三月六五%、七月三九%）シアリ之

ヲ以テ米國內閣ニ對シテ判断スルハ過早ナリトスルモ從來

「一ソ一」ノ參戰ヲ希望スルモノ少カリシ實情ニ比シテ日早期終戰希

望ニ基ク米國內閣向ノ一傾向ヲ示スモノトシテ注目ヲ與スベシ

尙從來解散セラレアリシ米國共產黨ノ一傾向、對獨戰終了後ニ於ケ

ル貸與法延長等ハ「一ソ一」關係ノ強化ニ對シテ一歩前進ト觀ルヲ

得ベシ

二、英一ソ一及一ソ一英關係

英一ソ一及一ソ一之關係亦一ソ一之關係乃至協約内

ノ前途ヲ豫想セシムルモノアルコト前途ノ如シ

三一ソ一ノ對日影響ニ關スル米英ノ態度

メ米ガ一ソ一ノ對日影響ヲ若シテアリヤハ相當論議ノ被ルル

所ナルモ前途與日關係ノ結果影響ヲ受ケル者増加シアルノミ

ナラズ一ソ一ノ介入必至ト見ラルル今一ソ一前ニ相互勢力絶

對等ニ關シ協定ヲ遂ゲ相當ノ代償ヲ與フルモノ一ソ一對日影響ニ

依リ早期終戦ニシテカントスルコトアリハ考慮シ置クノ要アルベ

シ

2. 重要自體トシテハ寧一ソ一ノ參戰ヲ希望セザルベキモ早晚一ソ一

ノ參戰ヲ見ルモノトセバ米英ニ適應シテ遠メ適合ヒラツケ一ソ一

ノ無制限進出ヲ阻止スルノ學ニ出ズルコトアルベシ

第六 「ソ」ノ對日作戰準備進捗状況

一、最近ニ於ケル「ソ」ノ對日作戰準備ハ豫想以上ノ進度ヲ示シアリテ

八月末頃ニハ武力發動可能ノ態勢ヲ一應概成シ得タリ

ルトキハ本年初秋ノ候對日武力發動ノ算極メテ大ナリ

ノ兵力集中状況

「ソ」ノ今次兵力集中ハ其ノ規模等ヨリ見ルニ差當リ人、九月頃

ヲ一應ノ目途トシ對日戰隨時介入態勢ノ整備ヲ企圖シアルモノノ

如ク狙撃四〇箇師團基幹ノ場合ニ於テ八月末狙撃五〇箇師團ヲ場

合ニ於テ九月末其ノ輸送ヲ概ネ完了スルモノト判斷セラル

イ、集中速度

七月ニ於ケル集中速度ハ一日平均70乃至75列車ヲ急激ニ増
加シ八、九月頃ヲ目途ニ相當ノ努力ヲ傾注シアルモノノ如シ

(註) (一) 四月以降集中速度ノ増加狀況左ノ如シ

四月	一日平均	一〇列車
五月	"	一五列車
六月	"	一八列車

(二) 集中速度ヲ漸増セル場合ノ集中所要期間左ノ如シ

狙撃師團四〇ノ場合 約二ヶ月
狙撃師團五〇ノ場合 約三ヶ月

月別	區分	集中速度	集中所要期間
九月	1050	1700	狙撃師團四〇 (3000列車)
	900		
八月	900	1600	狙撃師團五〇 (3700列車)
	750		
七月	750	1500	

注: 九月、八月、七月の集中速度はそれぞれ1700、1600、1500と減少している。また、所要期間は狙撃師團四〇と狙撃師團五〇の二種類に分かれている。

(註) 四月以後六月迄ノ集中運度ハ深ク増加シテ其ノ増加

率ハ月約一〇〇—一五〇列車ナリ

四月 約三〇〇列車(一日 一〇列車)

五月 約四〇〇列車(一日 一五列車)

六月 約五五〇列車(一日 一八列車)

ロ 集中輸送ノ内容

七月ニ於ケル輸送内容ニ於テ自動車ノ著増ヲ見逐次後方部隊ノ充實ニ移行シツツアルモノノ如ク「ソ」ガ八、九月頃ヲ一應ノ目途トシアル場合ニ於テハ必然ノ徵候ト見做シ得ベシ

2. 兵力及軍需品等ノ國境方面ヘノ推進

右兵力東送ニ伴ヒ各方面共逐次兵力及軍需品等ヲ國境方面ヘ推進シ特ニ彼ノ攻勢正面ト從來ヨリ斷セラルル地區ヘノ集中就中綏芬河正面ニ於ケル戰術的展開ノ狀況ハ嚴戒ヲ要スルモノト思考セララル

3. 越冬及冬季作戰準備ノ狀況

極東特異ノ極寒期ヲ「ソ」ガ自ラ好ンデ利用セントスル公算ハ少カルベシ
而シテ現在迄ノ所大兵團ヲ以テスル冬季作戰準備ニ關スル徵候

ヲ捕捉セザルト共ニ越冬準備ニ關シテモ小規模ノモノヲ散見ス
ル程度ニ過ギズ

右ハ「ソ」ガ極寒期到來前作戦行動ヲ發起セントスル有力ナル
企圖トモ觀察セラレ警戒ヲ要スル所トス

(註)從來ヨリ大ナル施設ナキ國境附近ニ於ケル大兵團ノ越冬ノ諸
準備施設ハ關特演、「ノモンハン」事件當時等ニ徴スルモ尠

大ナルモノアルベシ

第七 結 論

一、要之世界政治情勢ハ「ソ」ニトリ益々有利ナル方向ニ進マントシ

「ソ」ノ積極的東亞進出ヲ促進スベキ要因ノ増加ヲ豫察セシムル

モノアリ而シテ「ソ」ノ對日態度ハ本質的ニ之ヲ見レバ大變遷ヲ

ナカルベキモ其ノ現實的動向ニハ特ニ警戒ヲ要スルモノ多シ特ニ

軍事情勢ニ於テ然リトス

二、翻ツテ「ソ」ヲ纏ル米英支ト日本トノ關係ヲ見レバ現實的ニハ確

カニ我ニ不利ナルモ「ソ」聯ガ對日問題ニハ依然深入ヲ避ケ抱ク

非自主的態度ヲ持シアルガ如キヲ以テ本質的ニ見レバ我ニトリ必

ズシモ不利ニハテラス政治的キト日ソノ一側ト尙屬ヲ有シアリト
見トク得ベク茲ニ對「ソ」施策ノ餘地ナリ

情乙第 八三號

米英重慶對日共同聲明ニ關スル觀察

昭和二〇八八
大本營陸軍部

一、要旨

- 一、米、英、重慶三國ハ25/7「ボツダム」ニ於テ日本ニ對シ即時無條件降伏ヲ勸告スル共同聲明（別紙第一参照）ヲ發表セリ
- 二、本聲明ハ米國ノ主唱ニ係ルモノト思考セラルルモ之カ發表ノ眞意ハ概ネ左ノ如ク判斷セラル
- 三、諒謀略的ニ日本ニ於ケル和平氣運醸成ヲ狙ヒ日本國內ノ統制腐ニ軍官民ノ離間ヲ策ス
- 四、米國內ニ於テ抬頭シツツアル對日戰即時終結要望ニ對スル趨勢ヲ考慮スルト共ニ米國民ニ對シ降伏ヲ肯セサルハキ日本軍トノ今後ノ作戰ニ於テ損害増大モ又止ムヲ得サルヲ認識セシメ予メ國內輿論ニ對シ伏線ヲ構成ス

めくれず

3. 今後ニ於ケル對日處理ノ準備ヲ示ス
三、米英ハ本聲明發表前ニ於テ「ソ」聯ニ對シ之ヲ提示セシハ疑問ノ
余地ナカルヘキモ之ニ對スル「ソ」聯ノ態度ハ「ボツダム」會談
ニ關スル發表ニモ鑑ミ不介入主義ヲトリテ今後ニ於ケル自主的行
動ニ支障ナカラシメタルモノト推測セラル

二、說明

一、本說明ハ對日戰ニ結集セラレアル聯合國ノ軍事力ヲ誇示シテ今ヤ
聯合軍ハ日本ニ對シ最終的攻勢ヲ展開スヘキ態勢ニアリトナシ日
本敗北ノ不可避性及日本カ抗戰ヲ繼續スルニ於テハ徹底的破壊ア
ルノミナリトノ點ヲ強調スルト共ニ無條件降伏後ノ日本處理方針
ヲ示シテ繼續ノ無意味ナルコトヲ指摘シアリ
二、本土決戰ヲ目捷ノ間ニ控ヘタル政戰兩略ノ機微ナル現段階ニ於テ
本聲明ノ發出ハ一見比較的寛大ナルカ如キ日本處理方針ヲ發表シ
以テ日本國內ニ於ケル和平氣運醸成ヲ企圖セルモノト云フヘク米

英ハ之ニ依リ日本ノ即時無條件降伏ヲ僥倖シツツモ必スシモ之ヲ
期待スルコトナク寧ロ日本國內ノ團結特ニ軍官民ノ離間ヲ策シタ
ルモノト思考セラル

三、對獨戰終了後米國ハ日本ノ對米妥協和平説ト關聯シ再度ニ直リ對
日無條件降伏方針ヲ修正セサル旨言明シ來レルカ(29/6及ヒ10/7
聲明)米國輿論モ一般的ニ右ヲ支持シ居レリ(別紙第二參照)從
ツテ本聲明ヲ目シテ米國カ對日戰遂行方針ニ動搖ヲ來シ居ルモノ
ト觀察スルハ當ラサルヘシ 唯米國內ニ於テハ無條件降伏ノ内容
ニ關シテハ之ヲ今ヨリ闡明シ以テ平和招來ヲ促進スヘシトノ要旨
ハ行ハレ居リタルモノニシテ(「リッブマン」上院議員「ケーブ
ハート」及ヒ「ホワイト」、「ヘラルド」トリビューン「タイ
ム」「ライフ」誌等)本聲明ハ斯カル輿論ノ要旨ヲモ考慮セルモ
ノナルヘシ
又本聲明ノ發表ニモ拘ラス日本カ之ヲ肯シザル爲今後ノ作戰ハ

續セラルルハク從ツテ將來豫想セラルル損害ノ増大モ止ムヲ得ザル
モノトナシ國民ニ對シ政府攻撃ノ矛ヲ避ケントスル意圖ヲモ加味
セルモノナルヘシ

四 曩ニ「カイロ」宣言（別紙第四參照）アルニモ拘ラス敢テ本聲明
ヲナセルハ三國カ對日戰完結ノ方式トシテ飽ク迄無條件方針ヲ堅
持スルト共ニ更ニ一方面的無條件降伏後ノ日本處理方針ヲ示シ其ノ

對日處理ノ基準ヲ示セルモノト謂フヘシ

五 本聲明ニ於ケル日本處理方針ハ一見比較的寛大ナルカ如キモ右ハ
多分ニ伸縮性ヲ有シアリテ（例ハ八國體ニ關シテハ直接言及シ居
ラサルカ如キ）今後ノ情勢推移如何ニ依リテハ本聲明ノ如何ニ拘
ラス日本處理ヲ寬嚴何レニモナシ得ヘク此ノ點前大戰ニ於ケルウ
イルソン」ノ十四原則ニモ鑑ミ特ニ警戒ヲ要スルモノアリ（別紙
第三參照）

六 本聲明發表前ニ於テハ三國會談ト關聯シ「トルタン」カ對日和平

條件ヲ「ボツダム」會談ニ携行セリトカ或ハ「スターリン」カ日
本ノ和平 提案ヲ携行セリトノ風説行ハレタルカ本聲明發出ニ因
シテ米英ハ豫メ「ソ」聯ノ諒解ヲ求ムルト共ニ「ソ」ノ誘引ニ努
メタルハ本聲明カ「ボツダム」ニ於テ發表セラレタル件及ヒ聲明
中ノ措辭（南樺太等ニ何等言及シ居ラス）等ヨリスルモ明カナル
モ「ソ」聯カ「ボツダム」會談ニテ何等東亞問題ニ關係シ居ラサ
ル事實ヨリシテ「ソ」ハ今後東亞問題ニ關シ自主獨自ノ立場ニ於
テ處理スルモノト推測セラル

別紙第一

米英重慶三國對日共同聲明（譯）

一、吾人即合衆國大統領、中華民國國民政府主席及ヒ英國首相ハ吾人國民數億ヲ代表シ協議ヲ遂ケタル結果日本カ今次戰爭ヲ終結スヘキ機會ヲ與ヘラルヘキ旨同意ニ達セリ

二、合衆國、英帝國及ヒ支那ノ尨大ナル陸海空軍ハ西歐ヨリノ陸軍及ヒ空軍ニ依リ著シク増強セラレ今ヤ日本ニ對シ最終的打撃ヲ與フヘキ態勢ニアリ右ノ軍事力ハ日本カ抗戰ヲ停止スル迄對日戰ヲ遂行スヘシトノ全聯合國ノ決意ニ依リ支持且鼓舞セラレアリ

三、蹶起セル世界ノ自由國民ノ偉力ニ對スル獨逸ノ無益且無意味ナル抵抗ノ結果ハ日本國民ニ對シ先例トシテ恐ルヘキ明確性ヲ以テ嚴在シアリ今ヤ日本ニ對シ精集セラレタル武力ハ抵抗スル「ナチス」ニ加ヘラレ其ノ結果「ナチス」獨逸ノ人員領土、工業及ヒ全獨逸ノ國民ノ生活様式ヲ破壊セル武力ヨリ遙カニ大ナリ吾カ武力ノ全面

的發揮ハ日本軍ノ徹底的潰滅ノ不可避ナルヲ意味シ且日本本土ノ徹底的破壊モ亦不可避ナリ

四 日本カ其ノ誤レル判断ニ依リ日本帝國ヲ潰滅ノ淵ニ導キタル獨斷的國賊タル軍部ニ依ル統治ヲ更ニ繼續スルヤ或ハ日本カ理性ノ道ヲ辿ルヤヲ決スル秋ハ來レリ

五 以下ハ吾等ノ條件ニシテ吾等ハ之ヨリ逸脱セサルヘシ他ニ選擇ノ餘地ナシ吾等ハ此ノ遲滯ヲモ容赦セサルヘシ

六 吾人ハ平和ト安全ト正義ノ新秩序ハ無責任ナル軍國主義カ全世界ヨリ驅逐セラレサル限リ其ノ實現不可能ナルヲ主張スルカ故ニ日本國民ヲ欺キ且誤導シテ世界征服ニ乗出サシメタル權力ト勢力トハ永劫ニ抹殺セラルヘカラス

七 新カル新秩序カ樹立セラレ且日本ノ戰爭能力カ破壊セラレタリトノ首肯シ得ヘキ證左ヲ得ル迄ハ吾人カ茲ニ闡明セル基本目標ノ實現ヲ確實ナラシムル爲聯合國ニ於テ指定スル日本領土ノ諸要點ハ

占領セラルヘシ

八 「カイロ」宣言ノ諸條項ハ實施セラルヘク且日本ノ主權ハ本州、北海道、九州其他吾等カ決定スヘキ諸島嶼ニ限定セラルヘシ

九 日本軍ハ完全ニ武裝解除セラレタル後自己ノ家庭ニ歸リ平和ニシテ生産的生活ヲ營ムヘク機會ヲ與ヘラルヘシ

十 吾人ハ日本ヲ民族トシテ奴隸化シ又ハ國家トシテ破壊スルコトヲ意圖シ非サルモ吾カ俘虜ニ對シ殘虐行爲ヲナセル者ヲ含ム凡テノ戰爭犯罪者ニ對シテハ嚴格ナル處斷ヲ加フヘシ

日本政府ハ日本國民ノ間ニ於ケル民主主義的風潮ノ復活並ニ助長ニ對スル一切ノ障礙ヲ除去スヘシ基本的人權ノ尊重ノ勿論、言論、宗教及ヒ思想ノ自由モ亦保障セラレサルヘカラス

一一 日本ハ其ノ經濟ヲ維持シ正當ナル現物賠償ヲ可能ナラシムヘキ諸産業維持ヲ許容セラルヘキモ日本ヲシテ戰爭ノ爲再軍備ヲ可能ナラシムヘキ産業ノ維持ハ許可セラレサルヘシ之カ爲原料資源ノ入

手ハ許容サルヘシ但シ資源ノ支配ハ別問題トス究極ニ於ケル日本
ノ世界貿易關係参加ハ許可セラレヘシ
二三級上ノ諸目的カ實現セラレ且日本國民ノ自由ニ表明セラレタル意
思ニ基キ平和的意圖ヲ有スル日本政府カ樹立セラルルニ於テハ
合國占領軍ハ速ガコ日本ヨリ撤收セラレヘシ
一三等入ハ日本政府ニ對シ此ノ際全日本軍ノ無條件降伏ヲ宣言シ且斯
カル措置ニ於ケル日本政府ノ誠意ニ關シ適當ニシテ充分ナル保障
ヲ提供スヘキコトヲ望望ス然ラサルニ於テハ日本ニ殘サレタル途
ハ迅速且徹底的破壊アルノミ

別紙第二

日本ノ對米和平申入説

(一) 對米和平申入説

獨乙崩壞以後中立國筋ニ於テ屢々日本ノ和平工作傳ヘラレ、米
ニ於テモ同様和平申入説流布セラレタルニ對シ、六月二十九日ア
ルル一國務次官ハ記者會見席上之ヲ否定セリ
其後華府ニ於テハ右和平申入説跡ヲ絶々サリシモノノ如ク、七月
三日共和黨上院議員「ケープハート」ハ右「ゲル」ノ否定ニモ
不拘容月日本政府カ和平提唱ヲ行ヘリトノ確カナル情報ヲ有ス右
ニ於テ日本政府ハ一切ノ占領地ノ返還及陸海軍ノ降伏ヲ申出テ
皇室ノ安泰ヲ要求セル由ナルカ、若シ右條件ニテ千戈ヲ收ムル
得ハ、之以上ノ戰爭繼續ハ無益ナルヘシ。蓋シ一年後ニ於テモ
人ハ結局右以上ノ結果ハ得ラレサルヘシ
ト述ヘ更ニ上院議員「ホワイト」ハ上院ニ於テ

日本ノ絶望的抗戦ノ抛棄ヲ早ムル爲大統領ハ對日無條件降伏ノ内
容ヲ明示スヘキナリ
ト要求セル旨傳ヘラレタリ

(二)「ワグネル」聲明

右ニ對シ「ワグネル」國務次官ハ七月十日再ヒ聲明書ヲ以テ、米國
政府ハ日本政府ヨリ公式或非公式ノ和平申入ヲ涉受セルコトナ
ク、六月二十九日當時ノ情勢ト何等變化ナシトシ、然シ乍ラ國務
省カ入手セル日本側ノ和平打診ニ關スル情報トシテ、
(イ)有力ナル日本ノ實業家連ニ於テ聯合國カ承認スヘキ妥協和平ノ
條件ヲ知ラント欲シタルコト、(ロ)一中立國政府ノ東京駐在代表ハ
日本ノ一個人カ同人ニ對シ日本ハ無條件降伏ヲ到底受諾シ能ハサ
ルヲ語リタル旨ヲ述ヘタルコト、(ハ)一中立國ニ於テ日本使節團ノ
幹部ノ一人カ獨乙新聞人ヲ通シ極東ニ於ケル米國ノ眞ノ利益ハ米國

(三)「ワグネル」聲明ノ反響

ニ於テ無條件降伏ヲ抛棄シ妥協平和ノ條件ヲ提示スヌアサトノ意
見ヲ洩シタルコト、(二)某人物ハ一中立國內ノ米國使節ニ對シ聯合
國ノ無條件降伏ヲ緩和セシムル爲右中立國政府ニ接近スヘキ權能
ヲ與ヘラレ居ル旨ヲ述ヘタルコト等ノ事例ヲ舉ゲ、斯ル日本側ノ
和平打診ハ聯合國間ノ分裂ヲ招フモノニシテ日本ノ軍事的位置ノ
悪化並ニ一般的國民狀態ノ急迫ヲ告タル現在夙ニ豫想セザレタル
處ナリトシ、對日無條件降伏方針ハ何等變更セラレス而モ右無條
件降伏ハ曩ニ五月八日「トルーマン」大統領ノ聲明ニ依リ闡明セ
ラレタル通り日本民族ノ絶滅ヲ意味セス却テ其レカ現ニ蒙リツツ
アル苦惱ヨリ救出スルニ外ナラサル旨ヲ述ヘタリ
米國各紙ハ何レモ右「ワグネル」聲明ヲ社説ニ於テ取上ケ、「ワグ
ネル」カ對日無條件降伏主義ヲ再確認セルハ時宜ニ適セルモノトシ
テ之ヲ支持シ居ル處主ナル論評左ノ通りナリ

- (1) 「ワグネル」聲明ハ聯合國間ノ分裂ニ對スル日本側希望ヲ封殺セ
ルモノナルカ其ノ殺後第四答ハ三國會議ニ依リ與ヘラレハシ
「ワグネル」聲明ハ日本ノ和平謀略ヲ曝露セルカ眞珠灣、馬尼刺
等ニ於ケル日本ノ暴舉ヲ記憶スルモノニトシ日本ノ和平提唱ヲ
信願スルモノナカルヘシ「紐育」ワグネルド・テレグラム」
- (2) 日本ノ指導者ハ今コソ降伏カ自殺カヲ急速ニ決定スル要ニ迫ラ
レ居ル事態ヲ認識スヘキニシテ、日本人間ニ今尙空襲ヨリ自
ノ破壊ヲ防キ得ヘシト信スルモノアリトセル最近機動部隊ニ對
スル空襲ハ其レカ單ナル幻想ニ過キサリシヲ知悉セシメタルヘ
シ「華府」「ポスト」
- (3) 「ワグネル」聲明ハ日本ニ對シ妥協平和ノ夢ヲ拋棄スヘキヲ警告
スルト共ニ米國入並ニ聯合國ニ對シ日本ヲツケテ斯ル希望ヲ抱
カシムルガ如キ言動ヲ差控フル様任告セルモノト觀ラレラ
日本側ノ和平打診ニ對スル最善ノ返答ハ現ニ展開セラレツツア

- ル空爆作戦ノ激化ナリ「紐育」タイムズ」
- (5) 米國政府ハ飽ク迄對日無條件降伏方針ヲ堅持スヘク米國ノ輿論
モ亦之ヲ支持スルコト疑ヒ無シ米國ハ斯ル方針ヲ日本ニ強制ス
ル軍專力ヲ有スルモノニシテ、日本ハ遅カレ早カレ、結局米國
ノ課スヘキ條件ニ於テ屈伏ヲ餘儀ナクセラルヘク、右條件ハ一
切ノ軍事力ノ剝奪ニアルトヲ銘記スヘシ「華府」「スター」
- (6) 米國側ニ於テ降伏ニ就キ折衝セントノ氣配ヲ示セハ、日本ハ之
ヲ米國ノ弱身ヲ示スモノトシテ抗戰意思ヲ固ムヘシ、無條件降
伏ノ要求ハ「カイロ」宣言ノ實施ニモ沿フモノニシテ、日本指
導者カ不可避ノ運命ヲ自覺スルコト早ケレハ早キ程日本ノ再興
ノ爲ノ物質的基礎ハ大ナルヘシ「ブルナモア」・サン」
- (7) 無條件降伏カ何等日本民族ノ抹殺ヲ意味モサル旨ノ公式聲明ニ
不拘、如何ナル具體的條件ヲ課スルヤヲ提示シタルコトナキヲ
以テ日本ノ抗戰拋棄ヲ促進セシムル爲ニモ、米國ノ課スヘキ條
件ヲ聲明スヘキナリト主張スルモノアリ、右ハ妥協平和ト區別

スルヲ要スルモ「グルー」聲明ハ少クトモ斯ル條件ノ提示ヲ否
定セルモノナリ「華府「スター」」
右論説ノ外「ザカリマス」大佐ハ日本向放逐ニ於テ、無條件降伏
主義ハ日本軍カ新嘉坡、馬尼刺ニ於テ米英軍ニ強要セルモノニ外
ナラストテ城山ニ於ケル西郷ノ降伏ヲ引用シツツ日本カ無益ナル
抗戦ヲ放棄スルハ賢明ナル策ナリト述ヘ、評論家「デイヴィッド」
「ロイレシス」ハ日本ニトリ無條件降伏以外ニ道ナク抗戦繼續ハ日
本ノ入的犠牲ヲ徒ラニ加重セシムルニ止ラス、日本再興ノ經濟的
基礎ヲモ破壊シ盡スニ至ルヘント述ヘ、又上院議員「バークレイ」
「民主黨院内總務」ハ日本ハ究局ニ於テ和平ヲ乞フニ至ルヘキモ
モ先ツ日本ヨリ「イニシヤナブ」ヲ執ルヘキナリト述ヘタル由ナ
リ

別紙第三

「ウイルソン」ノ十四原則

- 一九一八年一月八日「ウイルソン」ハ上下兩院合同會議ニ臨ミ左ノ
如キ所謂十四原則ヲ發表シ右ヲ平和招來ノ基礎トナスヘキ旨明カニセリ
- 一 秘密外交ノ打破
 - 二 海洋ノ自由
 - 三 通商ノ自由及障害ノ除去
 - 四 軍備縮少
 - 五 植民地問題ノ公平ナル是正
 - 六 「ロシヤ」領土ノ復舊
 - 七 「ベルギー」ノ恢復
 - 八 「アルザス・ローレーヌ」ノ復舊
 - 九 「イタリー」國境ノ改訂
 - 十 「オーストリー・ハンガリー」民族ノ自治的發展

十二、「バルカン」民族ノ獨立擁護

十三、「トルコ」領内ノ民族解放及「ダーダネルス」海峡ノ通行ノ自由
十四、「ポーランド」獨立及海國供與

十五、西國際聯盟ノ組織

右聲明就中民族自決主義ハ中歐諸國ニ多大ノ動搖ヲ齎シタルモノノ如ク特ニ「チエツコ・スロバキア」及「ユーゴスラヴィア」ヲ刺戟シ爲ニ「オーストリーハンガリー」ハ政戰ノ重要段階ニ於テ分裂スルニ至レリ

他方本聲明ハ當初米國ノ一方的宣言ナリシカ十月四日獨逸ハ右ヲ基礎トシテ和平ヲ提案シ來リ米國ハ右ヲ十一月五日聯合國ニ提示シ聯合國又略々「ウイルソン」ノ原則ニ基キ和平交渉ニ應スヘキヲ諾シ斯クテ十一月十一日休戰トナレリ
ハ獨、埃、洪國內ニ於ケル和平氣
斯クテ「ウイルソン」ノ十四原則ノ對獨處理ノ基準トナレルモノニシテ

又當初一方的宣言ニ過キサリシ本宣言カ後日交戰國間ノ和平交渉ノ基礎トナレル點注意ヲ要ス
尙獨逸降伏後ノ取扱ハ右ノ原則ニモ拘ラス賠償問題、領土問題等ニ於テ苛酷ヲ極メタルモノニシテ右ニ徴スルモ今次對日聲明ノ措辭語法等伸縮性大ニシテ注意スヘキ點ナリトス

別紙第四

米、英、重慶三國共同聲明（所謂「カイロ」宣言）

（一九四三年十二月一日發表）

本會談出席ノ軍事専門家間ニ於テ今後ノ對日作戰ニ關シ意見ノ一致ヲ見タリ三大聯合國ハ殘虐ナル敵（複數）ニ對シ海陸空ヨリ苛責ナク壓迫ヲ加ヘントノ熱望ヲ表明セリ現在右壓迫ハ既ニ増加シツツアリ三大聯合國ハ今次ノ戰爭ハ日本ノ侵略ヲ阻止スルト共ニ日本ヲ懲罰センカ爲ニ戦ヒアルモノニシテ自國ノ爲ニ何等ノ利益ヲ追求スルモノニ非ス又領土擴張ノ意向ナシ三國ノ目的ハ一九一四年第一次世界大戰開始後日本カ獲得シ又占領セル一切ノ太平洋ノ島嶼ヲ剝奪シ支那ヨリ日本カ奪取セル滿洲、臺灣及澎湖島等ヲ中華民國ニ返還セシムルニ在リ更ニ日本ハ其ノ暴力及貪慾ニ依リテ奪取セル其他ノ領土ノ領土ヨリ驅逐セラレヘシ三國ハ朝鮮民族ノ隸屬的地位ニ鑑ミ適當ナル時期ニ朝鮮ヲ解放シ獨立セシムル事ヲ決意セリ

斯ル目的ニ基キ三國ハ他ノ對日交戰諸國ト共ニ日本ノ無條件降伏迄
強烈且長期ノ必要ナル作戰ヲ繼續スヘシ

極 藏

「ソ」ノ對日參戰ニ伴フ米ノ戰爭指導ニ關スル觀察(研究案)

二〇八一〇
大陸第六課

一、米ハ東亞ニ於ケル一部戰略上必要ナル要地要域ヲ占領確保シ之ヲ
基盤トシテ東亞ノ實質的把握特ニ新資本主義的經濟制覇ヲ企圖シ
アリ之カ爲「ソ」ノ對日參戰ニ伴ヒ米ハ聯合國特ニ「ソ」ト緊密
ナル協同連繫ヲ保持シ益々連續且強力ナル對日攻勢ヲ實施スルト
共ニ愈々政略ヲ熾烈ナラシメ以テ成ルベク損害ヲ避ケツツ概ネ^{26/7}
米英重慶對日共同聲明ノ線ニ沿フ對日早期終戰ヲ企圖スヘシ
二、米ハ「ソ」ノ參戰ニ先チ之ト所要ノ協定ヲ遂ケタルヘク又今後之
トノ結束ヲ愈々固ムルニ努ムヘシ、
主トシテ對「ソ」ノ考慮ニ基キ米ノ企圖スル東亞要域ノ處理ハ左ノ
如ク判斷セラル
ノ絕對ニ確保シ他ノ追隨ヲ許ササル地域
南洋諸島

沖繩、硫黃島

2. 主動權ヲ確保スヘキ地域

臺灣

中南支

朝鮮中南部

3. 「ソ」ノ優先權ヲ認メツツモ發言權ヲ獲得スヘキ地域

北支

滿洲

北鮮

4. 「ソ」ノ絕對權ヲ認ムル地域

樺太及千島

5. 日本本土（北海道本州四國及九州）ニ對シテハ米ノ主動的地位

ヲ確保シツツ當初聯合國ノ共同管理下ニ置キ爾後苛酷ナル條件

ヲ附シテ日本ノ主權ヲ認ム

6. 南方方面ニ於テハ英、佛、蘭ノ失地恢復ヲ認ムルモ其要域ハ特

殊地域トシテ米ノ指導下ニ掌握スルニ努ム

三、米ノ對日攻勢ハ「ソ」ノ參戰ニ伴ヒ愈々急速加重スヘク歐洲方面

ヨリ主力ノ回統ヲ待ツコトナク機ヲ見テ直路日本本土ニ侵寇スル

ノ公算大トナレリ

而シテ之ガ時機及規模ハ「ソ」ノ對滿鮮攻勢ノ進展ニ狀況就中本

土ト大陸トノ分斷效果、對日海軍就中原子爆彈攻撃ノ效果並ニ東

亞ニ於テ使用シ得ヘキ作戰兵力及船隻等ヲ勘案シ定メラルヘキ

モ據ネ本年秋季太平洋方面ヲ基地トシ本土決戰作戰ヲ強行スルモ

ノトモハ約三十ヶ師團ヲ使用シ得ヘク上陸方面ハ從來ノ判斷ノ如

ク一舉關東地方ニ侵寇スルノ算大ナルモ之ニ先タチ先ツ九州ニ第

一次決戰ヲ企圖スルノ算亦少シトセス

此ノ際基地航空ノ不足ハ機動部隊及東「ソ」ヨリスル「ソ」聯結

空機ノ協力ヲ以テ補ヒ基地獲得作戰ハ最少限ニ止ムベキモ大規模

ノ決戦作戦實施ニ先キ攻略的企圖ノ下離島の性格ヲ有スル本土ノ
諸要域（四國南岸、遠州灘要域、仙臺地區、新潟地區、富山地區、
若狹灣要域、米子地區等）ニ對シ一部兵力ヲ以テ攻略ヲ企圖スル
コトアルベシ
又「ソ」領ヲ基地トシ米英機動部隊ハ日本海ニ活動ヲ開始スヘシ
尙對「ソ」攻略上滿鮮方面戰況ノ進捗狀況ニヨリ日本本土上陸作
戦成功後或ハ之ト併行シ一部ヲ以テ朝鮮中南部及支那沿岸ニ作戦
スヘシ

261.00
106 (1-53)

